

平家物語における叡山仏教

渡 辺 守 順

一 序

平家物語の研究はたいへん盛んで、永井義憲著『日本仏教文学研究』の「日本仏教文学関係論文目録抄」などによると平家物語の仏教性について多くの論稿がある。そして、永井義憲氏の「平家物語と観音信仰」、山田昭全氏の「平家物語と比叡山」などの発表があつて、すでに平家物語に濃厚な叡山仏教の浸透が明らかである。平家物語の作者が叡山関係者であることもはつきりしているので、もはや平家物語における叡山仏教の究明の余地はないかに思われる。しかし、具体的に叡山の風土や人物がどのような形ででているかを明らかにしたものがないので、改めて考察した。

『今昔物語』が一七%、「宇治拾遺物語」が三二%、「古今著聞集」が二〇%、『沙石集』が三〇%、『太平記』が五〇%といったように、各作品の巻次ごとにどの程度の比叡山性が含まれているかを調べると、平家物語は三八%で、各巻の実

平家物語における叡山仏教(渡 辺)

態はつぎのようである。()内は各巻の叡山関係説話数。

- 卷一 一六(七) 卷二 一七(九) 卷三 一九(二〇) 卷四 一六(一一) 卷五 一四(四) 卷六 一二(七) 卷七 一九(七) 卷八 一一(四) 卷九 一九(二) 卷一〇 一五(三) 卷一一 一八(二) 卷一二 一九(五) 灌頂卷一 四(四) 計 一八九(七三)

右のうち、卷三、卷四が史料の引用が多いせいで、密度が濃く、やや文学性に乏しいところもある。灌頂の巻は文学性も仏教性ともに濃く、文学と仏教との昇華した美しさを示している。卷八から卷一一への内容に叡山性がきわめて薄くなつて行くところを検討すると、天台教学から浄土教への移行に深い関係がある。

二 平家物語に現われた叡山

平家物語の諸本はいろいろあつてどれをとりあげるかによつて若干の違いがあるが、本稿では岩波日本古典文学大系本

二四七

によつて、概況を把握したい。

(一)舞台 平家物語にでてくる地名の中から比叡山関係のものを巻一から順に摘記する。

巻一（延暦寺 園城寺 山門 西坂本 比叡山 東坂本 七社

山王 当山 山 根本中堂 八王子 日吉 三塔 赤山 大宮

二宮 講堂 中堂） 巻二（天王子 山門 御拜堂 根本中堂

中堂宝蔵 青蓮院 粟田口 文殊楼 四明 七社 叡岳 満

山 我山 山 両所三王 西塔 東坂 大講堂 山王 園城

東塔南谷 雲林院 山門領 三井寺 金剛寺院 東陽坊 西塔

三ヶ荘 坂本 さう井坂 天台山） 巻三（三井寺 仁和寺

山門 比叡山 靈山 法勝寺 日吉山王） 巻四（日吉社

我山 山門 三井寺 如意山 北嶺 園城寺 延暦寺 当山

円満院 成喜院 律成房 法輪院 平等院 金光院 証南院

五智院 仁和寺 本覚院 真如院 花園院 普賢堂 大宝院

清滝院 本坊 大講堂 鐘楼 経蔵 灌頂堂 護法善神の社壇

新熊野の御宝殿） 巻五（北嶺 日吉 園城寺 三井寺）

巻六（比叡山 千手井 山王院 日吉社 叡山 新比叡 山門

北嶺） 巻七（園城寺 山門 本社末社 叡岳 延暦寺 叡

山 山王七社 東坂本 天台山 仁和寺） 巻八（山門 鞍馬

寺 薬王坂 横河 東塔 南谷 東塔 天台山 山 三井寺）

巻九（法勝寺） 巻一〇（黒谷） 巻一一（法勝寺） 巻一二

（鞍馬 吉野 遍照寺 天王寺 山） 灌頂卷（寂光院 天台

山 大原

右の地名・寺名を概観すると『古今著聞集』や『沙石集』のように広範囲でなく、『今昔物語』や『太平記』のようにやや集中的である。三塔の詳細な寺坊名の特色は見あたらず、山とか叡山といういい方が多くて叡山の社会的な浸透の実態がしからしめたからであろう。それは、叡山を語るときの平家物語の作者が、説話文学と比較してより一般的となり大衆を主にしたからである。

(二)人物 人物についても、座主・高僧などをとくに區別せず、天台僧であればすべて巻数順に列記する。ただ、舞台と同じように同一巻の中で重出する人物名はわずらわしいので省略した。

巻一（教侍和尚 智証大師 山門の大衆 浄憲 西光 俊寛

円応 延暦寺寺官 山門止綱 仲胤 しろ大衆 官位なき僧

神人 宮仕 専当 豪運 座主 上綱） 巻二（乗円 無動寺

法師 祐慶 西塔の悪僧 明雲 座主 衆徒 覚快 行玄 前

座主 伝教大師 証憲 義真和尚 一行阿闍梨 山王大師 山

法師 大衆 公願 覚尋 座主） 巻三（覚快 円惠法親王

頼蒙 良真大僧正 慈恵大師 山王大師 伝教大師 浄憲 明

雲） 巻四（山門大衆 公願 三井寺法師 真海 慶秀阿闍梨

源覚 日胤 禅智 義宝 禅永 荒土佐 伊賀公 鬼佐渡 荒

太夫 角六郎坊 嶋の阿闍梨 筒井法師 卿阿闍梨 光乘 春

秀 一来法師 明秀 尊月 尊永 慈慶 樂住 玄永 一如房

阿闍梨 覺宋 俊秀 金光院の六天狗) 卷五(円惠法親王

淨妙明秀) 卷六(澄憲法印 慈惠 叡山の学侶 定惠) 卷

七(山僧 大衆 衆徒 山王大師 伝教大師) 卷八(寂場坊

大衆 円融房 山の座主 寺の長吏 明雲 円惠法親王)

卷一〇(衆徒 義真) 卷一一(能円 仲快 融円) 卷一

二(弁慶 寺法師 山法師 山僧) 灌頂卷(寂昭)

以上の登場人物をいちいち検討しないけれど概観すると、大衆とか山門大衆といういい方がしばしばあつて、平家物語をささえた叡山の僧が伝教大師・智証大師などの座主高僧から衆徒のグループに移つたことを示していて、大衆の活動が活発である。とくに荒土佐・伊賀公・鬼佐渡などの表記は他の作品に見られなかつたが、それぞれ成喜院・律成房・法輪院に住んでいたというから、興味をそそる。もちろん、本来の高僧といわれる人々ではないけれど、延暦寺・三井寺の実権をもつていた階層であろう。

三 平家物語の叡山教学

平家物語に叡山仏教の思想が色濃くにしんでいる実態についてはすでに多くの先学が指摘されたが、具体的にでている經典・用語を列記するとつぎの通りである。

卷一 「観音火抗變成地 歴却不思議力及ばず」(法華經)

平家物語における叡山仏教(渡 辺)

「百座の仁王講」「薬師講」「問答講」「和光垂跡」「万徳円満の世界」(摩訶止観)

卷二 「如意輪法」「顕密兼学」「大乘妙経」「十二神将」

(延暦寺根本中堂薬師如來の眷屬)「一心三観」「三千一乘」

「円宗の教法」「鎮護国家の道場」(根本中堂)「受戒灌頂」

「天台の仏法」「大小乗の法門」「阿耨多羅三藐三菩提」

(伝教大師の和歌)

卷三 「天台の仏法」「一乗守護」「法華八軸」(法華經八卷)

卷四 「円頓一味の教門」

卷五 「法華經一万部転説」「妙法蓮華經」「提婆品」

卷六 「一乗妙典」「一切経」「法花経」「薬王菩薩」「勇施菩薩」

「天台の仏法護持」「敬礼慈恵大僧正、天台仏法擁護者、示現最初將軍身、悪業衆生同利益」「法花経一万部転説」

卷七 「薬師如來」(根本中堂本尊)「顕密の宝輪」「止観十乘」

「天台仏法」「円実頓悟の教」「王子眷屬」「東西満山」

「護法聖衆」「十二上願日光医王善逝」

卷一〇 「法花」

灌頂卷 「天子聖靈成等正覚頓証菩提」「一念の窓の前には

撰取の光明を期し、十念の柴の柩には聖衆の来迎をこそ

待つるに……」

右のような次第で、天台教学から浄土教学への展開を如実

待つるに……」

右のような次第で、天台教学から浄土教学への展開を如実

に示した文学といえる。「天台仏法」から「聖衆の来迎」への用語上の移動を知るとともに、法華経の一節を引用するにしても、そのままではなく一部を変えている。經典の原文をそのまま引用することをやめて、和文調にしている点からも、叡山の仏教が仏教界だけでなく、一般へはみだしてきたことを知りうるのである。すなわち、叡山仏教が貴族だけのものではなく、大衆化してきたのである。

四 結 語

以上紙数の都合でたいへんずさんな列挙的な考察に終るけれども、中世的人間像と社会像を巧みに描いた平家物語において叡山仏教にかかわる人物と風土と教学が、およそ七八%の密度をもつて投影していることを知つたが、これはかなり大きな領域を占めている。平家物語の形成に叡山仏教を重視しなければならぬとすれば、平家物語の理解のために、天台教学や比叡山の歴史をよく知らねばならない。昭和四七年度はNHKの大河ドラマで『新・平家物語』（吉川英治原作）がとりあげられ、『平家物語の旅』など類書が多く発行され、平家物語の読者も急増した。しかし、それらの新しい平家物語の著述に、風土的な解説は多かつたけれど、天台教学や叡山の思想に及んだものは少なかつた。

そこで、徒然草にある「山門のことをゆゆしく書けり」

と平家物語を評したことをどう理解するかの問題を如上の実態調査の形で迫りながら、比叡山が中世的世界の縮図であり、中世的秩序の確立に貢献した事実を明らかにしたいと思つた。

もちろんその目的を完全に果すことはできなかったが概観的にわかつたことは叡山仏教において、①高僧から大衆へと活動の中心が移り、②旧寺坊の登揚が減少して新寺坊があらわれ、③天台浄土教の理念が大きく浮かびあがつてきたことである。そして、乱世における生き甲斐が、戦いと仏教と恋と風流にあると先学が平家物語の主題を指摘したのに賛成しながら、その仏教の中で叡山がかなり大きな存在であることを再確認できた。戦いも恋も風流も、思想的にみると浅いものでしかないが、仏教が暗く、無常であるという現代的抵抗はあるものの、叡山の仏教が現世利益の薬師如来を中心に、かなり明るい天台浄土教をうちだして、乱世を生きぬこうと志向した点は高く評価すべきである。

参考文献

- 拙稿「今昔物語における叡山仏教」本誌第十三巻第一号。
- 拙稿「宇治拾遺物語における叡山仏教」本誌第十六巻第一号
- 拙稿「太平記における叡山仏教」本誌第十七巻第二号
- 拙稿「古今著聞集における叡山仏教」本誌第十九巻第一号
- 拙稿「沙石集における叡山仏教」本誌第二十巻第一号